



本校は校訓として「学びの光、前途を照らす」を掲げています。

母体となった「東京市立光明学校」の開校に当たって、東京市長の永田秀次郎先生が、児童の将来の幸福を願って『光明（こうめい）学校』と命名されました。本校では、この歴史の重みと願いの込められた「光」「日」「月」の字を校訓の中に包み込み大切にしています。

新たに歩み始めた光明学園として新校舎竣工を機に、開校時の願いに立ち返り、校訓「学びの光、前途を照らす」を掲げ、学びに励む事こそが、幸福に続く途（みち）を照らし出す事に繋がるとの決意を自らに銘じることにしました。

この校訓が唱える決意は「人生の本舞台は常に将来に在り」とも重なります。この言葉は、国会議事堂前にある憲政記念館の玄関前にスウェーデンから贈られた大きな花崗岩の石碑に彫り込まれているものです。東京市長そして東京都名誉都民第1号となられた尾崎行雄先生が揮毫されたものです。尾崎行雄先生は「憲政の神様」「日本議会政治の父」として戦前・戦中・戦後と63年間と最長の国会議員として長く活躍され、国際平和を希求する清廉潔白な稀有の存在として国民広くから慕われた方です。

本校の母体校の歩みは、戦前唯一の身体障害のある児童のための学校として始まり、激動の時代を潜り抜けて途切れることなく今に続いています。つまり、学びをとおして逞しく生きる力を多くの学園生に育み、人生の本舞台に立たせることを積み重ねてきたのです。

学校は知恵と勇気と方法を学ぶための場であり、決してゴールではありません。将来訪れる本舞台を豊かな実りあふれる場とするための大事なプロセスとなる学校なのです。将来を期して本校の門をくぐる学園生を全力で教え導き、本舞台へと羽ばたかせることが本校の使命です。この校訓は、学びに励むことで、前途を照らし出す決意が込められているのです。

光明学園 開校校長

田村康二郎